



分析から人生訓を学ぶ

縁あって知己となった豊田中研の加藤雄一さんから歴史と重みのある“バトン”を受け取りました。聞けば2008年のスタートから約100番目の“走者”とのこと。会員歴3ヶ月の私に？と訝りつつ生来の面白がり気質から二つ返事でお受けしましたが、今、その重責に（というか文才のなさに）喘いでいます... とはいえバトンは既に手の中。機会をくださった加藤さんに感謝しつつ、まずは“落とさない”ように筆を執らせていただきます。

分析者としての私のキャリアは、修士卒で入った会社で医薬品の分析部門に配属された約四半世紀前に始まりました。「えっ？ で会員歴3ヶ月？」などのツッコミには別の場でお答え（言い訳）させていただくとして、配属先での最初の任務はHPLCによる製剤中の薬剤定量でした。経験も知識もない当時は“もっともらしい値”を早く出すことしか考えていませんでしたが（秘）、少し慣れ飽き始めた頃に不純物の構造解析を任せられ、黎明期のLC/MSに触れたことが分析の面白さ・奥深さを知るきっかけでした。今やLC/MSは汎用法ですが、当時は難度の高い複合分析法（いわゆるハイフネーテッド法）の代表格で、手先が器用で理屈好きな性格が向いていると思われたようです。その後、海外留学や化粧品部門への異動を経験しましたが、一貫して分析、特に質量分析分野で末席を温めつつやらせていただいています。

さて、本題である“分析から人生訓を学ぶ”，です。やや奇をてらったタイトルですが、せっかくの機会ですので一風変わった私の分析の楽しみ方を紹介したいと思います。きっかけはクロマト分析でした。ご存知のようにクロマトグラフィーのピークの形は、成分がカラムを通過する時間の統計的な分布を示します。従って、単一成分からなるピークの一部を分取してリクロマトすると、どこをどのくらいの時間幅で（どんな形状で）分取しようが、元のピークと同じ保持時間に相似形のピークが観測されます。原理がわかる方には当たり前ですが、初学者には不思議に映ることが多いようです。ある日、後輩に原理を説明していた時、この現象が会社や学校における“選抜”と似ていることに気づきました。例えば、入学試験は学力偏差値による“分画”です。一定学力以上の学生を選抜しても、暫く経つと学力差ができ新たな分布となる様子は、まさに分取・リクロマトで起きることと同じではないか！ となると、学校での教師の努力は、「いかにテーリングをなくし高分離・迅速化を達成するか」、等のクロマトグラフィーのそれと本質的に同じだと気づいたのです。カラム内で分離される成分はいわば“生徒”。大きな流れに乗って仲間とともに激流を進み、様々な外力に翻弄されつつ、先の見通せない中で最短距離を進もうとするイメージ。ヒト社会の出来事に置き換えることで親近感が湧くとともに、分析的な考え方が日常生活での課題への対処に応用できることに気づいたのです。

ある日ある時の状態



その数分後



写真：「犬猿の仲の猫？ いえ、実は仲良し」（物事的一面・データの一部だけで判断すると本質を見誤ることへの戒め?!）

このような視点で分析法やデータを見るようになると、やたらと分析をヒトの人生に結びつけてみたくなります。例えば質量分析では、測定したい成分を気相の単分子イオンにする必要があるため、イオンへのなりやすさで成分間の応答に差が出ます。混合物を分析する場合、いわゆるマトリックス効果と呼ばれる干渉が起こることがありますが、その程度がどのくらいかを予め知ることはできません。会社や社会の何に似ているかはご自身で想像いただくとして、私には“万物は多種多様”，“物事を見ただ目で判断しないように”，などの示唆を与えてくれているような気がするのです（写真参照）。検出モードもしかり。選択イオン検出（SIM）や選択反応検出（SRM）といった特異性の高い検出モードでは、見えない（無視している）成分が共溶出して妨害となる場合があります。これは、“多様な視点をもつこと”，“視点を変えること”の大切さを伝えてくれているのでは？ といった具合です。

ここまでくると勝手なこじつけや妄想に近い状態ですが、ツボにはまった私にはもう止められません。仕事として日々分析しながら隠されたメッセージ(?)を探し、繋がりを見つけては膝を打ち悦に入る。これが私の見つけた分析の新しい楽しみ方です。

こうして改めて分析という仕事について考えてみると、その最大の美点は“物事を分析的にみる力を鍛えてくれること”という気がします。日々の作業は分離・測定といった単調な作業の連続だとしても、生き抜くための解析・洞察力強化の訓練と思えば苦になりません。ただ残念なことに、よく生きるためのヒントはくれますが、未来を教えるはくれません。こんな妄想と駄文でバトンを繋いだ気になっている私の行く末も含めて...

とにもかくにも、何とかバトンを「落とさずに」ここまで来ることができました。次の走者は、北大分析センターの岡 征子先生に託したいと思います。加藤さんともそうでしたが、初めてお会いした瞬間にピンとききました。何かしら共鳴できそう、波長が近いかも、と。私より遥かにしっかりされていますが、無類の分析好きには間違いありません。きっと楽しくセンスの良いエッセーを綴ってくださいと思います！

〔株資生堂グローバルイノベーションセンター〕
本山 晃